

## 後期 **共生塾** のご案内

### 「こども虐待とその支援 ～地域で支えるために」

**日 時** 2008年2月2日(土)～3月8日(土)

**場 所** 龍谷大学 瀬田キャンパス 6号館プレゼンテーション室

- 講座内容**
- ① 2月2日(土)  
「社会現象としての虐待」 講師：津島 昌弘 (龍谷大学社会学部 准教授)
  - ② 2月2日(土)  
「医療現場から見た子ども虐待」 講師：岡田 隆介 (広島市子ども療育センター 心療部長)
  - ③ 2月9日(土)  
「虐待対応における法的アプローチ」 講師：安保 千秋 (弁護士)
  - ④ 2月23日(土)  
「児童相談所における支援」 講師：川崎二三彦 (子どもの虹情報研修センター 研究部長)
  - ⑤ 3月8日(土)  
【I部】 講演「虐待対応における支援と連携」  
講師：山田 容 (龍谷大学社会学部 准教授)  
【II部】 シンポジウム「子ども虐待～地域で支えるために」  
シンポジスト：松村 睦子 (NPO法人子ども虐待防止ネットワーク・しが)  
幸重 忠孝 (滋賀文化短期大学講師、スクールソーシャルワーカー)  
周防美智子 (大津市子ども家庭相談室)  
コーディネーター：山邊 朗子 (龍谷大学社会学部 教授)  
コメンテーター：山田 容 (龍谷大学社会学部 准教授)

※詳細は決定次第、追ってホームページ・ちらし等でお知らせいたします。ご期待ください！

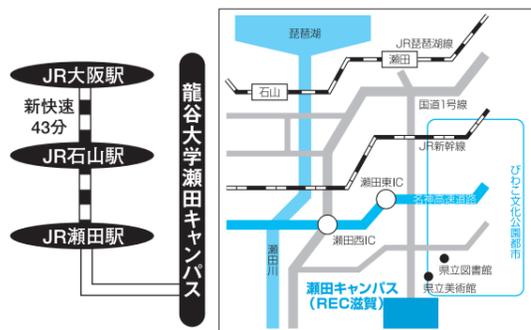
### 福祉フォーラム会員専用メーリングリストを ご利用ください！

会員様同士や会員様と本学教員とのコミュニケーションの場として、専用のメーリングリストを開設しています。以下のアドレスにメールを送っていただきますと会員様全員に送られるようになっています。  
「本学教員にこんなことを相談したい」「今、こんなことをしているので広報したい」など、ぜひご利用ください!!

**アドレス** fukushi-forum@ebisu.fks.ryukoku.ac.jp

### お問い合わせ

龍谷大学福祉フォーラム事務局 (REC滋賀)  
〒520-2194 滋賀県大津市瀬田大江町横谷1-5  
TEL: 077-543-7744 FAX: 077-543-7771  
E-mail: r-fukushi@ad.ryukoku.ac.jp  
ホームページ: <http://rec.seta.ryukoku.ac.jp/fukushi/>



- JR琵琶湖線「瀬田」駅下車 (JR京都駅より16分)  
帝産バス「龍谷大学」行き (約8分)
- 名神高速「瀬田西IC」(大阪方面から)  
「瀬田東IC」(名古屋方面から) より  
文化ゾーン方向へ車で約5分 【駐車場有】

# 福祉フォーラム通信

Vol.3

発行日: 2007年12月20日  
発行元: 龍谷大学福祉フォーラム

## 福祉フォーラム公開講座「共生塾」を新規開講！



大友 信勝氏  
(龍谷大学社会学部教授・福祉フォーラム会長)

龍谷大学福祉フォーラムでは、今年度より新たに公開講座「共生塾」を起ち上げました。2007年度は年2回(前・後期)、社会問題や社会福祉課題について具体的なテーマを取り上げ実施しています。前期は、6月2日(土)、6月30日(土)、7月21日(土)の3日間にわたり、本学社会学部教授で福祉フォーラム会長 大友信勝氏により「日本における福祉のまちづくりモデルの教訓と課題—秋田県鷹巣町(当時)の検証」と題して開講しました。

秋田県鷹巣町は、町長の決断のもと、全国初の24時間ホームヘルプサービスを始め、全室個室の老人保健施設をつくり、「高福祉のまち」を目指していたことで知られている。ところが、2003年の選挙で、「福祉にお金をかけすぎ」という対立候補が町長に当選。鷹巣町に今、何が起きているのか。何度も鷹巣に足を運び、客観的な検証を行ってきた大友氏からこの問題に関する豊富な資料が提示された。

1日目は、「鷹巣町モデルの特徴—デンマークから学び、高齢者福祉サービスへの夢と希望を育てる福祉のまちづくりへの挑戦」として、1980年代以降の社会的背景と社会福祉をめぐる客観的状況を示し、1991年岩川町長による鷹巣町の画期的取り組みをふりかえる。そこで取り入れられたデンマーク・モデルの本質を市民参加型のユーザー・デモクラシーだと解説。続いて、羽田澄子監督「あの鷹巣町のその後(2005)」を上映した。

2日目は、「鷹巣町業務改善調査(2003)からみる福祉のまちづくりへの批判とその論点」で、調査委員会の特質と各調査委員の報告書にみる論点を検討した。その上で、ハードとソフトの両面からA苑と比較して「ケアタウンたかのす」(老人保健施設)の特徴と意義を浮き彫りにした大友氏の見解が示された。

最終日には、「ケアタウンたかのす」への批判的風聞の見極めを通してその誤りを明らかにし、グループホームと高齢者安心条例(虐待防止)の廃止にみる福祉切り捨ての論理と進め方が利用者や職員にもたらした影響を、再認識した。ケアの本質に迫る論議とともに、これだけの実践をしながら社会的発信が十分にできていなかったのではないかと指摘も加え、「市民参加と民主主義をどのように育てていくか」が今後の大きな課題として投げかけられた。鷹巣モデルの教訓を具体的に学びながら、わが町にひきよせて、自らはどう行動するのかを深く考える機会となった。

受講生は3日間とも40名近くで、積極的な発言もいただき、大変充実した講座であった。

### 受講生の声

- ◆ 「鷹巣の行動を遠くから注目してきた福祉関係者として、系統的に整理され詳細を知ることができたことは、わが町の福祉を見直す上で大変参考になりました。」
- ◆ 「一般市民としては知ることのできない実態を聞くことができた貴重な機会でした。小さな町で起こった想像を越える政争とその結果はショッキングです。」
- ◆ 「3回を通して強く心に決めたことは、『自分たちの実践を伝えなあかん』ということです。日々、積み重ねて伝えていく。顔を見て、話して、一緒に考えて、作る、ことが間違った選択をしないための基盤になると思いました。」



# オータム・フォーラム 「いのちと尊厳」を開催

去る9月8日(土)～9日(日)、オータム・フォーラムを開催しました。オータム・フォーラムは毎年秋にテーマを定めた大規模なフォーラムで、記念すべき第1回のテーマは「いのちと尊厳」。凶悪犯罪、虐待、自殺の増加など、行き場を見失い立ちすくんでいる人が増え続けている今、「生きる意味」を問い直し、そして「死ぬこと」について真剣に向き合いました。当日は、多数の方々にご参加いただき、盛況のうちに終了しました。



羽田 澄子氏  
(映画監督)

その後、本学社会学部教授 大友信勝氏との対談を行いました。

羽田澄子監督は、「痴呆性老人の世界(1986)」、「安心して老いるために(1990)」から「あの鷹巣町のその後(2005)」へと、高齢者のいのちと尊厳を支えるシステムを見つめ続けてきた。講演では、テーマ設定の動機となっ

**1** 日目は、「生命と尊厳の源流をたずねて」と題して、映画「終りよければすべてよし(2006)」を上映後、羽田澄子監督に講演いただき、

た妹さんの死にふれて、日本の医療の中に人間の最期をどう受け止めるかの思想がないと指摘。しかし、だめな点を告発するばかりでなく、「よい医療」に目をむける映画をと思い、日本、スウェーデン、オーストラリアの「ここまでできる」高齢者の在宅ターミナルケアの取り組みに迫った。対談では、大友氏が、羽田氏のドキュメンタリーは社会問題を提起しつつ、夢と希望を示し、時代をどう切り拓いていくかの方向性を示していると述べ、羽田氏からは、医師の力、チームの力、そしてそれを引き出していく住民の力の大切さが指摘された。日本には個々により取り組みがあっても点でしかない。緩和ケアを含む優れた在宅医療をどこでも誰でも活用できるためには、当事者を中心とした「暮らしを支えるシステム」を作ることが必要で、これは福祉の問題である、と対談は結ばれた。

**2** 日目は、午前中、6つの分科会に分かれて各講師を囲み、共に考えました。

## ① 「老・病・死」のケア学

「共苦と支え」を人間の生命の本性にとらえ、チェルノブイリ、タイ、ケアタウン浅間温泉という3つの現場から、支えの本性を発動させる意識とプロセスを提起した。



高橋 卓志氏  
(龍谷大学社会学部客員教授  
長野県神宮寺住職)

## ③ 格差社会と生命・尊厳の危機



大友 信勝氏  
(龍谷大学社会学部教授)

所得再分配の構造にみる格差拡大、生活保護最前線にみる貧困の罍の拡大、格差が生み出す貧困の世代間連鎖、セーフティ・ネットの危機とその克服について、具体的かつ建設的に見る目を学んだ。

## ② かけがえのないいのちを護る一歎異抄の心

あらゆるものへの慈愛、愛の反対語、悪人正機の意味、いのちへの慈しみと悲しみについて、ブツダ、親鸞、宮沢賢治、あるいは現代の夜回り先生 水谷修ほかの思想と実践にふれて具体的に考えた。



鍋島 直樹氏  
(龍谷大学法学部教授)

## ④ 高齢者の福祉ターミナルケアとは何か —グループホーム等の実践を通して

利用者本位のケア、生活支援の延長としての看取り、福祉ターミナルケアの意味と実際を、グループホームでの実践を通して検討。人としての尊厳をどう守るかについて意見交換された。



岩尾 貢氏  
(龍谷大学社会学部教授)

## ⑤ 精神科医と社協職員が語る精神保健福祉の支援



写真左から 山口 浩次氏  
(大津市社会福祉協議会)  
辻本 哲士氏  
(滋賀県立精神保健福祉センター次長)

滋賀県精神保健福祉センター、大津市社会福祉協議会での相談援助、援助職を支えるミーティングの必要性を知った。分科会の中で自己を語る場面もあり、実践的に学んだ。

## ⑥ 傷つきたいのちを地域で育む —被虐待児と里親との暮らし

茗荷村、田村一二先生のこと、「村是」とその生き方、被虐待児の里親としての取り組みが、実例を通して語られた。



写真左から 松本比呂子氏  
(特定非営利活動法人わらべ村代表)  
北川 温子氏



お昼休みにはフォーラム会場でトロンボーンデュオ+αの生演奏を楽しみました。

午後は、「生きる意味」と題し、シンポジストに参議院議員で薬害エイズ訴訟原告 川田龍平氏と文化人類学者で東京工業大学大学院准教授 上田紀行氏をお招きし、本学客員教授 高橋卓志氏のコーディネートのもとシンポジウムを行いました。なお、高橋氏の提案で、黒板に貼った対比的キーワードを取って自由に話すという形式がとられました。



川田氏はまず「グローバルとオルタナティブ」を選び、グローバル化の進む今日、別の道を選択するオルタナティブが重要だと述べた。上田氏は、オルタナティブは自分の中に隠れていたもの、抑圧されたものの声と結びつくことが大切だと付け加え、「肯定と否定」では、各人がかけがえのない私という思いを持ってなくなっている現状を述べ、ダライ・ラマとの対話から社会の根底には愛と思いやりがなければならないと述べた。また、「弱者と強者」についても、他者の弱さに出会った時に自分の弱さに出会い、生きる意味を与えられるのだと、自らの一代記にもふれて語った。川田氏はまた「スローとファースト」について、大事にしたいのは「スロー」だと述べ、



川田 龍平氏  
(参議院議員・薬害エイズ訴訟原告)

民衆の中の自治に誇りをもち、「生きていることをよかったと思える社会にしたい」と語った。

最後に、高橋氏は組織にしがみついている我々に、もう一度自由になろうと呼びかけ、「本当の意味での信頼にもとづいた生き方を地域の中で！」と結んだ。それぞれのいのちを通して紡ぎだされたことばが呼応しあうシンポジウムであった。

## アンケートに寄せられた参加者の声から 一部をご紹介します。

- ★「人間というもの、自分というものに向き合うことが、生命と向き合うことであると感じました。」
- ★「個別性を考えたターミナルケアの事例を知ることができた。理念だけでなく具体的な試行錯誤の姿がおもしろかった。」
- ★「いろんな切り口から“生きる意味”を考える場となり、本当に良かった。事象のみを捉えるのではなく、背景をしっかりと見ていきたい。」



上田 紀行氏  
(文化人類学者・東京工業大学大学院准教授)

民衆の中の自治に誇りをもち、「生きていることをよかったと思える社会にしたい」と語った。